

に添ひ、黒ボコ岩の上に第一路に會する、砂防工事の爲に開いたもので、亦一ノ軒を測り、險難を厭ふものは多く之を取る。第三は舊市、瀬温泉から湯谷川に添うて上り、川を渡り、釋迦ヶ岳・四塚山を経て尾添口登路の北龍ヶ馬場に出で、大汝岳から室堂に至る一四軒のものがある。次に北麓からするには、第一尾添から美女岩坂(美女坂)・長坂などを登り、北龍ヶ馬場・大汝岳を経るもので、室堂まで一六軒を測り、第二尾添から岩間温泉に出で、長坂(前出長坂とは別)・藥師山・樺岡・見返坂・北龍ヶ馬場を経るものがあつたが、現に廢道となり、第三中宮温泉から温泉山・蛇谷峯・いちみ坂・かへで坂・地獄峯・彌陀ヶ原(市)・瀬登路の彌陀ヶ原とは別)・御花松原・しでの山を経て室堂に至るものは一ノ軒を測る。その他飛騨の平瀬よりするには、大白川の谷を登り、室堂まで一九軒、越前石徹白よりするには別山を経て室堂まで二〇軒であり、美濃から來るものも同じく石徹白を通過するを要する。是等の路線は、屢繰返される崩壞等の地變により、興廢移動することが多い。

シラヤマオクミヤツリ 白山奥宮祭 白山御前岳に鎮座する白山比咩神社奥宮では、初め陰曆六月十八日に開山祭、八月五日に閉山祭を行つたが、季節稍遅きに失するを以て、明治十二年から陽曆七月十八日開山、九月一日閉山に改め、明治四十年から閉山を九月十八日、昭和二年から九月五日に改めた。

シラヤマカゼ 白山風 白山の嶺上から吹きおろす風を白山風といふ。萬葉集卷十四相聞歌に『多久夫須麻之良夜麻可是』とあるものは是である。又義經記卷七に『白山のだけよりおろしたる風烈しくて、佐渡の峰を離れて、能登國鈴が三崎へぞむけたりける。』といふも、白山風である。

シラヤマカハ 白山川 白山に發する湯谷川と柳谷川との合流したもの、即ち牛首川の一名で、木滑新に至り手取川となるまでの間をいふ。しかし越前に在つて白山川といふものは九頭龍川のこと、それは別山の澗水を受けるものである。

シラヤマカハチ 白山河内 シラヤマコウチ 平家物語卷七越前籠合戦の事に『富樫入道佛登稻津の新介齊藤太林六郎光明叶はじとや思ひけん、城を出で加賀國へ引しりぞき白山河内に陣を取る云々』とある白山河内は、白山河の河内の意味であらう。

シラヤマカンヌシカミミチウチケイフ 白山神主上道氏系譜 一冊。白山比咩神社の神主上道氏の系圖で、原本は同社蔵である。寛弘二年氏吉が初めて白山檢校職に任ぜられたから、子孫數系に分かれ、寛永まで續いたが、皆その名、死去の年月、享年等を擧げてある。

シラヤマキ 白山記 (一) 概説 白山記は

現に白山比咩神社に蔵するもので、明治三十三年四月國寶に指定せられた。この書は紙本墨書で、堅二七八八種・横一八四八種、紙數凡べて十七葉を有し、全文中古體の漢文で、一種の訓點を附せられてゐる。固より浮屠の筆に成つたのだから妄誕附會も少くないが、古傳説を如實に記載した點に於いて、頗る價值あるものである。

(二) 著作年代 越登賀三州志來因概覽の註に、この書を正應四年に成つたとするが、これは白山記の奥書に正應四年五月一日書寫畢とあるに據つたもので、その誤謬たることに論はない。思ふに來因概覽は寛政十一年の著で、富田景周が當時未だ深く本書を研究しなかつたのであらう。然るに景周は文化十二年之を白山比咩神社に見て、男景煥に影寫せしめるに及んで、自らそれに序文を加へ、『景周按』跋文。此書不調何人編成。其初寫則在正應四年五月一日。而其後屢歷轉寫。至最後則永享十一年六月九日右筆定成者。於本州溫谷護法寺護摩堂上閑室一寫之了。即神庫所藏定成之内書是也。然則此書在正應四年前。而自今五六百年以往之遺物著明也。』といつて、その眞實を書いて居る。白山記には正應四年と永享十一年の間に尙『永和四年六月晦日金劍宮下院書寫畢。』『于時應永十六年五月十九日書寫畢。』の奥書があるのである。按ずるに白山記に、白山神の初めて託宣せるを養老三年とし、此の長寛元年癸未に至るまで四百四十五年とあるから、その長寛元年こそは著作年代と考へてよからう。

(三) 著者 白山記にはその末社末寺を述べた末に、『右依千妙聖人中宮長史隆嚴注之云

々。但私書割分少々在之。』とある。この隆嚴こそは著作者で、その編述に當つて千妙聖人の白山之記なるものを憑據としたと見える。本書の冒頭に『白山之記云。』の一行があるのも亦之が爲である。私書割分は即ち隆嚴の私見を加へた點で、例へば前に言つた『至此長寛元年癸未四百四十五年也。』の如きがそれである。又禪頂御鉢といふ條に、『南殿坊勸進興州秀衡五尺金銅像奉治鑄。』も同じ。何となれば秀衡は長寛元年以後廿五年なる文治三年に歿したから、隆嚴と同時代の人と思はれる故である。

(四) 追書 白山記々述の體を見るに別に第二の部分があつて、加賀・能登・越中に於ける一宮二宮三宮の次第、加賀の八大社、白山七社の本地垂迹、譬喻房阿闍梨と白山神との和歌問答、白山本宮の華表及び惣門の位置を記し、文體も稍異なつて居り、隆嚴の奥書を加へた後に記されてゐる。この部分は正應四年傳寫した時の書足しと見える。

(五) 刊本 白山記は改定史籍集覽第二百九十卷に採録せられてゐるが、多くの誤脱がある。殊に開卷第一の『白山之記云。』の一行を削つたのは、大なる不注意である。且つ原本の難解なる爲に千妙を千妙、隆嚴を隆嚴と誤つて居る。石川縣史第一版所載のものも、但私書割分を書制分と誤り、奥書の温谷護法寺護摩堂の護法寺を脱した。白山比咩神社藏書の秘籍集に收められたものも誤脱はあるが、正誤表を參考すれば良く、石川縣史第二版所載のものが最も原本に近い。

シラヤマキコウ 白山紀行 一冊。大聖寺の藩士小原氏益の著。文化十年七月越前の勝